



日本学術振興会バンコク研究連絡センター

活動報告(2012年1月～3月)

バンコクの風 ลมจากกรุงเทพฯ



4月11日、当センター新オフィス見学会（開所式）にて

前列左から、大槻朝比研修員（東京農工大学）、東京農工大学バンコク事務所 河井栄一所長、JSPS 国際事業部 田淵エルガ参事、大阪大学バンコク教育研究センター 関達治センター長、在タイ日本大使館 長谷川 哲雄一等書記官。後列左から、副センター長、東京大学生産技術研究所都市基盤安全工学国際研究センター 川崎昭如准教授、宇宙航空研究開発機構（JAXA）タイ駐在員事務所 水元伸一所長、国際協力機構（JICA）タイ事務所 田中章久次長、京都大学東南アジア研究所バンコク連絡事務所 小林知准教授、日本政府観光局（JNTO）バンコク事務所 益田浩所長、国際交流基金（JF）バンコク日本文化センター 内田裕所長、センター長、当センタースタッフ。

酷暑のソンクラン（タイ正月、水かけ祭り）を迎える直前の4月11日、当センターの移転（3月17日）と新オフィスの開所、学生支援機構（JASSO）とのオフィス共用開始（3月19日）を記念して、開所式を兼ねたオフィス見学会を開催しました。JSPS 本部より田淵国際事業部参事のほか、近隣の関係機関より駐在代表者をお招きし、当センターの今後の役割を議論いただいた次第です。改めて、JSPS に寄せられる多くの期待に触れ、身の引き締まる思いがしました。

新年度を新オフィスで迎え、気持ちも新たにセンター運営に励む所存です。

主な活動と目次

1月

9日(月)	サーミットタワー10階連絡会参加	P. 3
10日(火)	BRIDGE Fellowship 報告会開催@国立がん研究所	P. 3
"	JASSO より駒場財務部次長来訪	P. 4
17日(火)	AIT より川崎准教授来訪	P. 5
18日(水)	第7回タイ同窓会理事会開催	P. 5
19日(木)	東京工業大学主催 Acore セミナー出席	P. 5
"	京都大学より荒井教授来訪	P. 6
20日(金)	在タイ日本大使館主催科学技術連絡協議会出席	
"	大分大学より平田教授ら来訪	P. 6
"	関西大学より田村教授ら来訪	P. 6
31日(火)	コラート出張 スラナリー工科大学副学長を表敬訪問	P. 7

2月

1日(水)	大阪大学主催 Acore セミナー出席	P. 8
2日(木)	福岡工業大学より大谷理事ら来訪	
3日(金)	論文博士号取得者メダル授与式開催 タイ同窓会総会開催	P. 8 P. 10
15日(水)	京都大学より小野シニア・リサーチアドミニストレーターら来訪	P. 11
16日(木)	キングモンクット工科大学トンプリー副学長表敬訪問	P. 11
17日(金)	スリランカ出張 スリランカ中央環境庁を表敬訪問	P. 12
21日(火)	JASSO より石川主計課長ら来訪	P. 13
22日(水)	RESTEC より池田常務理事ら来訪	P. 14
"	JICA-MEXT 高等教育合同調査懇談会出席	P. 14
23日(木)	バングラデシュ出張 バングラデシュ同窓会科学シンポジウム開催(24-25日)	P. 15
26日(日)	大学評価・学位授与機構木村特任教授らと会食	P. 16
27日(月)	See Forum にてブース展示	

3月

2日(金)	国立科学博物館サイエンススクエアにて式典視察	P. 16
7日(水)	大分大学より内田助教ら来訪	P. 17
8日(木)	JST より屠国際科学事業部調査役ら来訪 NRCT へ Ms. Pimpun 国際部長を表敬訪問	P. 17
"	JSPS より川崎課長代理ら来訪	
13日(火)	国立科学博物館本館にて式典参加	P. 18
16日(金)	在タイ日本大使館主催科学技術連絡協議会出席	
17日(土)	オフィス移転	
19日(月)	新オフィスにて業務開始	P. 18
"	BRIDGE Fellowship FY2012 選考会開催	P. 19
20日(火)	東京農工大学より事務職員の研修受入れ	P. 19
22日(木)	フィリピン出張 フィリピン論博同窓会会長を表敬訪問	P. 19

■ 在タイ日本機関 情報交換会（サーミッタワー10 階連絡会）に出席 ■

<http://jsps-th.org/?p=2063>



左から

日本観光局（JNTO）高垣次長、国際交流基金（JF）内田副所長、JNTO 益田所長、学生支援機構（JASSO）萩原所長、日本学術振興会（JSPS）竹内センター長、JSPS 田辺副センター長、JF 嘉数所長、JF 平林部長、JNTO 天野次長

新年のあいさつと今年の事業予定についての情報交換をしました。

■ 国立がん研究所にて BRIDGE Fellowship 報告会開催 ■

<http://jsps-th.org/?p=2066>

2012年1月10日（火）、国立がん研究所（NCI: National Cancer Institute）にてJSPS事業説明会を兼ねたBRIDGE Fellowship（BF）報告会を開催し、約40名の参加者がありました。

これは、昨年6月21日にカセサート大学で開催した第一回のBF報告会にご参加いただき、研究計画を発表いただいた、NCIのDr. Danai Tiwawech, Senior Scientist Level 8, Chief of Cancer Biology Section, Research Divisionが、8月21日から9月30日までの日本再訪問を終えての報告会です。



JSPS事業説明会として、センター長による事業紹介のほか、論文博士号取得希望者に対する支援事業（論博事業）により2009年度に博士号を取得され、2011年2月のメダル授与式に出席いただいたDr. Archawin Rojanawiwat, Clinical Research Center, Department of Medical Sciences, Ministry of Public Healthにもご参加いただきました。

NCIからはDr. Thiravud Khuhaprema所長から開会のご挨拶をいただいたほか、Dr. Sukumal Sawangwaree研究部門長にモデレーションを務めていただきました。



Dr. Danai Tiwawechからは、研究集会でたまたま知り合いになったことで東京大学理学研究科へ論博研究生として渡日したこと、今回のBFにおいても引き続き東京大学理学研究科の石田貴文 准教授のもとを訪ねたことなどが紹介されました。また、今回の再渡日をきっかけに今後数年のうちに20件にのぼる共同研究計画が持ち上がったということで、非常に有意義で前向きな研究活動、ネットワーキングが展開されていることをうかがい知ることができました。



Dr. Archawin Rojanawiwatからは、拠点大学交流事業への関与をきっかけに長崎大学への論博事業申請が行われたことが紹介されました。長崎での非常にフレッシュな研究生活が伝えられ、参加者達の興味を引きました。

当センター長からの事業紹介としては、一度の申請だけで終わるのではなく、採用されるまで何度でも何度でも挑戦し続ける重要性を訴えましたが、今回講演いただいたお二人ともが2度目の申請によって論博の採用を勝ち取っており、諦めない粘り強さの大切さが証明された格好となりました。

当センターとしては引き続き、JSPS事業経験者との連携を図りながら、粘り強い活動を行っていききたいと思います。



国立がん研究所にて参加者一同と

■ JASSO より駒場財務部次長来訪 ■

<http://jsps-th.org/?p=2105>



左から

萩原隆史タイ事務所所長

鈴木昇財務部経理課長

センター長

駒場一永財務部次長

糸川佳秀同部経理課契約係長

堤逸郎留学生事業部留学生事業計画課課長補佐
オフィス共用に向けた打合せを行いました。

■ AIT より川崎准教授来訪 ■

<http://jsps-th.org/?p=2105>



左から

関達治 大阪大学教育研究センター長
センター長

川崎昭如准教授（東京大学生産技術研究
所 AIT オフィス）

AIT における洪水被害と復旧の様子を伺
いました。

■ 第 7 回タイ同窓会理事会の開催 ■

<http://jsps-th.org/?p=2108>



会議の様子

左から Dr. Chalermkiat、Dr. Boonchai、
Dr. Paritud、Dr. Sunee、Dr. Porphant、
Dr. Songsri、Dr. Busaba、Dr. Suvit、セ
ンター長、Dr. Malee 各理事

JAFT ロゴについて大胆なデザイン変更や
同窓会名の変更などが議論されました。

■ 東京工業大学 A-core セミナー開催 ■

<http://jsps-th.org/?p=2113>



中央がコーディネーターの吉村千洋教授
A-core 「アジアにおける都市水環境の保全・
再生のための研究教育拠点 (Establishment
of Core Institutions for Preservation and
Restoration of Urban Water Environments
in Asia)」の 2011 年度運営委員会が開催さ
れました。

■ 京都大学 荒井教授来訪 ■

<http://jsps-th.org/?p=2118>



左：荒井修亮 京都大学情報学研究科教授

右：センター長

SEASTAR2000 の第 12 回シンポジウム開催について共催のお話をいただきました。

■ 大分大学より平田教授ら来訪 ■

<http://jsps-th.org/?p=2121>



左から

大分大学吉野恵美子国際交流課主任

同医学部 内田智久助教

同教育福祉科学部平田利文 教授・評議員

センター長

タイで開催の教育エキスポに参加されました。

■ 関西大学より田村教授ら来訪 ■

<http://jsps-th.org/?p=2124>



左から

Dr. Chutima Vanchvattanadecha 関西大学バンコク

オフィス 所員、田村裕教授・理事、センター長

関西大学がバンコク・オフィスを開設されます。

Kansai Bangkok Office

Chulapat 11 building, Soi Chulalongkorn 12,

Phayathai Rd., Wangmai, Pathumwan,

Bangkok, 10330

Tel: 開設中

■ スラナリー工科大学副学長を表敬訪 ■

<http://jsps-th.org/?p=2218>

2012年1月31日(火)、当センターメンバー全員で東北部コラート別名ナコンラーチャシーマ(Korat, Nakhon Ratchasima)のスラナリー工科大学(Suranaree University of Technology)を表敬訪問しました。当センターの2011年度(4月から翌年3月まで)計画の一つで、タイ国内で認定されている研究型国立大学を表敬し、事業紹介をしようという一環です。これまでにバンコク市内のカセサート大学、チュラロンコン大学、タマサート大学、キングモンクット工科大学、マヒドン大学のほか、北部チェンマイ大学及び東北部コンケン大学を訪れており、これで9大学目です。



左二人目から

Asst. Prof. Dr. Padej Paolaor

Assistant Rector for Student Affairs

Dr. Guntima Sirijeerachai 副学長

Prof. Dr. Sukit Limpijumnong 副学長

センター長

副センター長

タイ人スタッフ

スラナリー工科大学(SUT)は非常に若い大学で、昨年2011年に20周年を迎えたばかりです。理学、工学、社会技術、農業科学、医学、看護の全6学部からなり、学生数は学部生10,000人、院生が2,000人。このうち6,000人ほどがキャンパス内の寮に暮らしており、小規模大学大学ならではの学生との一体化を目指していることが伺えます。

また、SUTはタイ国内では少数派のAutonomous University(自治大学)で、一般の国立大学に比べて政府の関与が小さく、裁量の範囲が広いことが特徴です。

今回は教育担当副学長(Vice Rector for Academic Affairs)である**Prof. Dr. Sukit Limpijumnong**及び学生担当副学長(Vice Rector for Student Affairs)の**Dr. Guntima Sirijeerachai**にお会いすることができました。

80パーセントを超える教員のPh.D.保有率は国内トップで、総合大学ではない工科大学として尖鋭化していこうという姿勢の現れと言えるでしょう。研究者の自己資金により一定期間の教育業務の離れることができる制度や、SUTの資金により一定の大学に出て、その後SUTに就職するといった制度がもうけられているということです。政府からの研究費のほかに寄付金による独自の研究資金も用意されています。

学生には卒業要件として企業でのインターンシップを課しており、2週間程度の短期ではなく一ヶ月を超える実地研修を経ることで、勉強への刺激もさることながら、社会人を育てる取り組みを行っています。

当センター長から若手研究者向けの事業紹介セミナーの開催を提案したところ同意が得られました。6月末を予定している現センター長離任までの間で日程調整をしていくことになります。

当センターでは今後も大学訪問及び事業紹介セミナーを継続していく所存です。

■ 大阪大学主催 Acore セミナー出席 ■

<http://jsps-th.org/?p=2222>



←司会をされるコーディネーターの大阪大学 仁平卓也教授

第23回タイ・バイオテクノロジー学会年次総会の一環として開催された「亜熱帯微生物資源を活用する次世代物造りバイオ技術の構築 (Next-generation bioproduction platform leveraging subtropical microbial bioresources)」

左：吉田敏臣元センター長

右：竹内渉現センター長



■ 論文博士号取得者メダル授与式開催 ■

<http://jsps-th.org/?p=2149>

2012年2月3日（金）、バンコク市内 Siam City Hotel, Bangkok にて、JSPS-NRCT RONPAKU Medal Award Ceremony を開催しました。



参加者一同での記念写真

これは、論文博士号取得希望者に対する支援事業により、2010年度に博士号を取得された研究者の方々に、その榮譽をたたえると共に一層の研究を奨励することを目的として、メダルを授与するものです。

今回は日本大使館より長谷川哲雄一等書記官、NRCT より国際部長（Director, Office of International Affairs）Ms. Pimpun Pongpidjayamaad にご挨拶いただきました。この他、NRCTからは事務局長 Prof. Dr. Soottiporn Chittmittrapapn のほか、理事をはじめとする JSPS タイ同窓会（JAFT）メンバーが複数参加し、新たに博士号を取得された3名の榮譽をたたえました。



左から

Prof. Soottiporn Chittmittrapapn 事務局長

Ms. Pimpun Pongpidjayamaad 部長

長谷川哲雄 一等書記官

仁平卓也 教授

加藤久 部長

このセレモニーは2003年3月に JSPS-NRCT Joint Meeting for RONPAKU Fellows と題して第一回を開催して以来、毎年 NRCT と共催しています。2010年2月にタイ国 JSPS 同窓会が発足したのをきっかけに、その名を JSPS-NRCT RONPAKU Medal Award Ceremony と改めました。

上述の通り、今年は3名の新規博士号取得者がおり、全員がセレモニーに参加しました。約30名の JSPS 同窓生が見守る中、JSPS 国際事業部 加藤久 部長よりメダルが授与され、その後、それぞれのメダル授与者による博士論文の発表が行われました。

ジュゴンに関する生態学研究（Dr. Kanjana Adulyanukosol）

琴の演奏技法と音階における美学（Dr. Kumkom Pornprasit）

発展途上国における知的財産権（Dr. Jumpol Pinyosinwat）

バラエティー豊かな研究内容にこそ、JSPS の学術支援の骨頂が現れていると言えるでしょう。



左から

Dr. Jumpol Pinyosinwa

加藤久部長

Dr. Kumkom Pornprasit

Dr. Kanjana Adulyanukosol

今年はさらに、大阪大学生物工学国際交流センターのセンター長 仁平卓也教授に特別講演を行っていただきました。仁平教授は現在、Acore 事業を実施しているほか、2010 年度 BRIDGE Fellowship の受入れ教員にもなっていたり、長年の JSPS 事業との関係を Research experience between Thailand and Japan with JSPS programs と題して語っていただきました。

若い研究者の参考になることはもちろん、JAFT 会員や JSPS 関係者、NRCT 関係者にとっても学ぶところの多い講演には大きな拍手が送られました。

■ 第3回タイ同窓会総会開催 ■

<http://jsps-th.org/?p=2251>

2012年2月3日（金）、バンコク市内 Siam City Hotel, Bangkok にて、第3回タイ JSPS 同窓会（JAFT : JSPS Alumni Forum of Thailand）総会が開催されました。

同窓会は2010年2月5日に Dusit Thani Hotel Bangkok で第一回の総会が開催されたと同時に発足し、2011年2月4日に第2回総会が Siam City Hotel, Bangkok で開催され、今回で3回目です。参加者は約40名。



同窓会メンバーでの記念写真。
中央女性が Dr. Busaba Yongsmitth 会長。

冒頭、同窓会長である Dr. Busaba Yongsmitth が発足までの経緯および発足から現在に至るまでの活動内容の報告を行いました。

その後、主に以下の議事内容について議論を行いました。

- ・新住所の決定
- ・2012年度 BRIDGE Fellowship の募集の報告
- ・名誉会員の授与
- ・同窓会名の変更
- ・同窓会ロゴの決定
- ・同窓会長及び理事の再任
- ・同窓会会員申請フォーム
- ・同窓会費の支払い

基本的にタイ語で展開されたため、当センターとしては詳細を把握することはできませんでしたが、議論は熱く参加者からは積極的な発言が相次ぎました。

■ 京都大学より小野シニア・リサーチアドミニストレーターら来訪 ■

<http://jsps-th.org/?p=2281>



左から

小野紘一シニア・リサーチアドミニストレーター
園部太郎リサーチアドミニストレーター
副センター長

2012年1月より京都大学に URA オフィスが開設
されました。

■ キングモンクット工科大学トンプリー副学長表敬訪問 ■

<http://jsps-th.org/?p=2285>

2012年2月16日(木)、当センターメンバー全員でバンコク市内 Bangmod にキングモンクット工科大学トンプリー (KMUTT) を表敬訪問しました。当センターの2011年度(4月から翌年3月まで)計画の一つで、タイ国内で9つ認定されている研究型国立大学を表敬し、事業紹介をしようという一環です。これまでにバンコク市内のカセサート大学、チュラロンコン大学、タマサート大学、キングモンクット工科大学、マヒドン大学のほか、北部チェンマイ大学及び東北部コンケン大学、スラナリー工科大学を訪れており、これで9校すべての訪問が完了しました。

なお、キングモンクット工科大学ラックラバン (KMITL) と KMUTT とは全く別の大学であることが判明しています。



左から

センター長

Dr. Naksitte Coovattanachai 学長顧問

Dr. Bundit Fungtammasan 副学長

KMUTT は1960年に設立され、1998年に Autonomous University (自治大学) になった新しい大学で、博士700、修士5,300、学部生12,000という比較的ちいさな規模ながらも、工学系の中でも特にエネルギーや環境に焦点を絞った研究教育を実施して、国内では最高の論文出版率を誇っております。

今回は研究担当副学長で、タイ国エネルギー環境合同大学院大学(JGSEE)の前学長であった **Dr. Bundit Fungtammasan** 准教授、国際担当学長補佐 **Dr. Anak Khantachawana**、知的財産担当 **Dr.**

Phongsri Waysarach、JGSEE 所属で日本での研究歴もある **Dr. Nakorn Worasuwanarak**、さらに学長顧問である **Dr. Naksitte Coovattanachai** 教授にお会いすることができました。

KMUTT では Learning Institute を置いて学生の能力の引き出しを試みたり、BTS 沿線に KMUTT City Center を作るなど、市内の大型大学に比べてきめの細かい教育研究を実践しています。その成果が論文出版率にもつながっていると言えるでしょう。

また、JGSEE に積極的にかかわっていくなど、工学（特にエネルギー・環境）分野での横のつながりも重視しています。JGSEE としては日本の京都大学エネルギー科学研究科、アセアン大学ネットワーク(AUN)、ラジャマンガラ工科大学(RMUTT)と国際フォーラムを開催するなど、分野を絞り中身のある国際活動を行っております。この他にも、金沢大学と日本工業大学が、学内にオフィスを構えています。

当センター長から若手研究者向けの事業紹介セミナーの開催を提案したところ同意が得られました。6 月末を予定している現センター長離任までの間で日程調整をしていくことになります。

■ スリランカ中央環境庁を表敬訪問 ■

<http://jsps-th.org/?p=2306>

2012 年 2 月 17 日（金）から 19 日（日）まで、センター長および副センター長がスリランカに出張しました。目的は、スリランカ中央環境庁（CEA: Central Environmental Authority）への表敬訪問です。



前列左から

Dr. Lal Samarakoon AIT 教授

Mr. Ajith 副センター長

JAXA 貫井智之氏

Mrs. Ellepola 所長

所長の後ろが Mr. Bandula

12 月のシンガポール出張 APRSAF 参加の際に、JAXA（宇宙航空研究開発機構）によってスリランカ国内で SAFE プロジェクト（Space Application for Environment：宇宙技術による環境監視プロジェクト）がスタートするという情報を得ており、過去のラオスやベトナムでの SAFE プロジェクトと同様に人材育成もその過程からははずせないことから、JSPS による人材育成さらには研究交流プロジェクトへの発展を視野に、そのキックオフ・ミーティングに参加させていただき事業紹介を行いました。

会議には、プロジェクト全体のコーディネーターとなる貫井智之 JAXA 地球観測センター職員や、スリランカ側のプロジェクトの主なメンバーである **Mr. Ajith Gunawardena** CEA ジョインフォマティクス・センター副センター長のほか、CEA 所長（Director-General）の **Mrs. R. Ellepola** が参加され

ました。

SAFEプロジェクトによる成果を用いてのJSPS事業への発展的継承や、その過程で人材育成を行っていくという当センターからの提案は非常に好意的に受け止められ、今後のSAFEプロジェクトの進展ともにスリランカの動向には目が離せません。

会議の翌日は、会議参加者でもある**Mr. Bandula Wickramarachchi**に同行いただき、AA-platform事業への申請案件になりうると考えられる現場へ赴きました。コロomboから車で2時間ほど行った中央部ピンナワラを訪問し、像園の食料廃材であるヤシの葉のエネルギーとしての再利用について、**Dr. Chandana Rajapaksa** 医師と意見交換を行いました。



左から

Mr. Bandula

Dr. Chandana

センター長

この他、Dr. Chanadanaによれば、スリランカとタイの間には像飼育についてのネットワークができており、その育成や医療について人材交換を行うなどしているそうです。我が国の獣医学的知見と交えることで、アジアならではの研究課題の発見や、タイでの研究セミナー開催にも可能性が広がり、非常に意義深いスリランカ出張となりました。

■ JASSO より石川主計課長ら来訪 ■

<http://jps-th.org/?p=2290>



左から

萩原隆史バンコク事務所所長

小島隆行主計課総務係長

センター長

石川和則主計課長

澤出綾子留学生事業部留学生事業計画
課主任

オフィス共用に向けた打合せを行いました。

■ RESTEC より池田常務理事ら来訪 ■

<http://jsps-th.org/?p=2294>



左から

伊藤恭一参事

池田要常務理事

センター長

RESTEC は今後、日本内外の大学と積極的に連携していく方針とのことです。

■ JICA-MEXT 高等教育合同調査懇談会出席 ■

<http://jsps-th.org/?p=2299>



前列左から、河野裕子 MEXT 高等教育局私学部私学助成課係長、河井栄一東京農工大学タイ事務所所長、大学評価・学位授与機構 森利枝准教授、大阪大学バンコク教育研究センター関達治センター長、在タイ日本大使館富田大志一等書記官。後列左から早稲田大学留学センター所長の黒田一雄教授、青山学院大学海外拠点事務所栗野純一所長、上智大学総合人間科学部の北村友人准教授、MEXT 高等教育局国際企画室 佐藤邦明専門官、センター長、タイ文部省傘下 Institute for Promotion of Teaching Science and Technology 安宅りえ氏、JASSO タイ事務所の萩原隆史所長、副センター長。

「東南アジア地域における国境を越える高等教育の現状と課題にかかる調査」は JICA（国際協力機構）より Asia-SEED（アジア科学教育研究開発機構）が委託を受けたもので、タイ、マレーシア、シンガポール、フィリピン、ベトナム、インドネシアを訪問し、各国の大学が実施中の国際協働プログラム、国際交流などの実態を把握、さらに今後の日本の関わり方を提案するというものです。

■ バングラデシュ同窓会科学シンポジウム開催 ■

<http://jps-th.org/?p=2328>

2012年2月24日（金）と25日（土）、バングラデシュの首都ダッカにて、バングラデシュ JSPS 同窓会（BJSPSAA: Bangladesh JSPS Alumni Association <http://www.bjpsaa.org/>）主催により、第3回科学シンポジウム「社会のための科学（Science for Society）」を開催しました。



これは、2008年の同窓会発足、2009年の第一回科学シンポジウム開催以来、毎年続けているもので今年が3回目となります。これまで毎年12月に行われてきましたが、2012年が日本-バングラデシュ国交樹立40周年に当たることから、それを記念して、今回は2012年2月の開催です。

タイトルの通り、社会と科学の関わりを軸に初日をセレモニーに、最終日をサイエンス・セッションにあて、バングラデシュの研究者や学生を中心に200名を超える参加者がありました。

初日、木村孟文部科学省顧問および Prof. Naiyyum Choudhury バングラデシュ科学アカデミー（BAS: Bangladesh Academy of Science）事務局長兼 BJSPSAA 会長よりキーノート講演をいただいたほか、南博之在バングラデシュ日本公使、バングラデシュ大学助成委員会（UGC: University Grant Commission）委員 Prof. M. Muhibur Rahman、バングラデシュで発行部数一位の英文紙 The Daily



日本からの招へい講演者である3名。左から
木村孟 文科省顧問
五十嵐泰夫 東大教授
内田隆史 東北大教授

Star 編集委員である Mr. Mahfuz Anam、JSPS 本部の里見昭彦人物交流課長より挨拶をいただきました。

その後、在バングラデシュ日本大使館の協力を得て大使公邸での夕食会が催され、招待者一同で食卓を囲みました。

また、2 日目である最終日は、日本より招へいた、東北大学農学研究科応用生命科学専攻内田隆史教授、東京大学生物生産工学研究センター長 五十嵐泰夫 教授を含む 10 本のプレナリー発表と、18 本の一般発表が行われ、盛んに意見交換が行われました。

今回のシンポジウムを機会に、今後、現センター長在任期間中については BJSPSAA とのコーディネート当センターで行うことが決まっており、センターとしてはタイをはじめとする東南アジア各国とは様々に異なる社会状況、人間関係などを学ぶよい機会となりました。

今後も引き続き、関係各所との連携を強めながら東南アジアおよび南アジアにおける研究者ネットワークの形成と強化に尽力していききたいと思います。

■ 大学評価・学位授与機構木村特任教授らと会食 ■

<http://jsps-th.org/?p=2297>



前列左から

秦絵里評価事業部国際課長

木村孟特任教授

川口昭彦特任教授

後列左から

井福竜太郎国際課係員

副センター長

センター長

大学評価・学位授与機構からの出張メンバーと合流し、夕食をご一緒させていただきました。

■ 国立科学博物館サイエンススクエアにて式典視察 ■

<http://jsps-th.org/?p=2350>

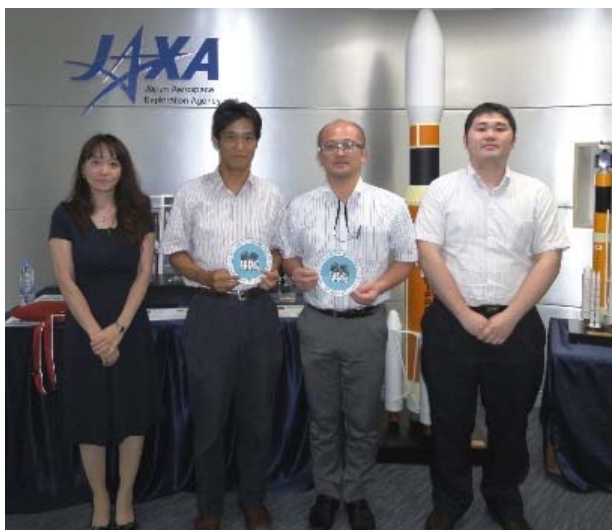


テープカットの様子

国際科学年を記念してキュリー夫人の足跡と業績を紹介する催しが開かれました。

■ 大分大学より内田助教ら来訪 ■

<http://jsps-th.org/?p=2355>



左から

大分大学国際交流課佐藤裕子主任

同医学部内田智久助教

JSPS 本部国際事業部海外派遣事業課川崎宏前専門
員（現・研究事業部基金管理課課長代理（当時））

同高橋翼係員

JSPS 本部による事業調査です。海外滞在中に現地
調査をすることで生の声を拾い、事業改善に役立て
ていこうという取り組みです。

■ JST より屠国際科学事業部調査役ら来訪 NRCT を表敬訪問 ■

<http://jsps-th.org/?p=2378>



左から

Ms. Arpar Nateprapai NRCT 職員

Ms. Pawanee Nakdee 職員

Mr. Sawaeng Jongsutjarittam アジア・アフリカ
担当課長

Ms. Pimpun Pongpidjayamaad 国際部長

屠耿（と・こう）JST 国際科学事業部調査役

矢野雅仁 JST シンガポール事務所シニア・プログ
ラムコーディネーター

副センター長

センタースタッフ

JST が新たに立ち上げるマルチラテラルのファンディング・スキーム e-ASIA Joint Research Program (e-ASIA JRP)について NRCT への紹介を行いました。

e-Asia JRP は東アジア (e-Asia) のみならず、東南アジアやアメリカ、ロシア、オーストラリアなども含む広い地域を含む多国間の共同研究枠組みで、各国のファンディング・エージェンシー負担によるマッチング・ファンドを確保しながら、それぞれに設定した分野での共同研究への参画を行うというもので、タイではすでに NSTDA の参加が決まっているということです。

■ 国立科学博物館本館にて式典参加 ■

<http://jsps-th.org/?p=2395>



中央の女性が Dr. Suchana Chavanich チュラロンコン大学准教授

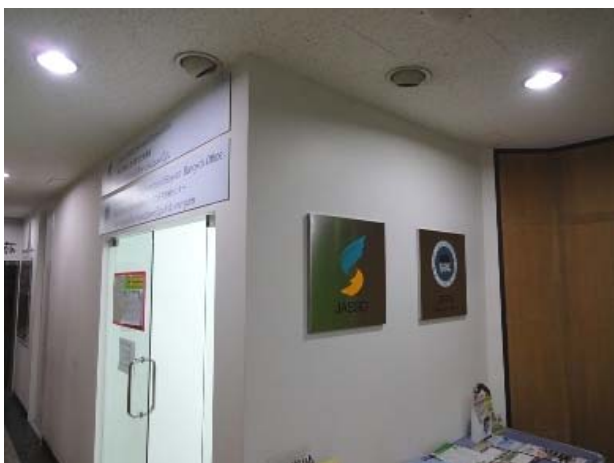
その右側男性が Dr. Voranop Viyakarn 同助教

Dr. Suchana の左へ国立極地研究所白石和行所長
Mr. Manop NSM 副所長。

日本の国立極地研究所とチュラロンコン大学の長年の協力関係を基本にした、南極探査に関する展示が国立科学博物館（NSM）で開始されました。

■ 新オフィスにて業務開始 ■

<http://jsps-th.org/?p=2391>



共用オフィスを示す2つの看板

2012年3月19日、JASSO（学生支援機構）とのオフィス共用がよいよ開始されました。2010年12月7日に閣議決定された「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」に従い、2011年度（平成23年度）内の①オフィスの移転、及び②JASSOとの共用という2つの課題を達成したものです。



玄関口上に掲げられた2つの機関名

連絡先は以下の通りです。

No. 1016/1, 10th Fl., Serm-Mit Tower,
159 Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110

Tel: 66-2661-6533

Fax: 66-2661-6535

■ BRIDGE Fellowship FY2012 選考会開催 ■

<http://jsps-th.org/?p=2386>



左から

センター長

Dr. Jiraporn Chauvalit 同窓会理事

Dr. Paritud Bhandhubanyong 同副会長

兼選考委員長、

Dr. Busaba Yongsmith 同会長

Dr. Boonchai Techaumnat 同理事

3名の候補者から JAFT 理事で

Sukhothai Thammathirat Open

University 経済学部准教授の **Dr.**

Porphant Ouyyanont が選出されまし

た。

■ 東京農工大学より事務職員の研修受入れ ■

<http://jsps-th.org/?p=2383>



左から

センター長

東京農工大学 大槻朝比総務チーム係員（研修員）

同 鈴木真由国際事業推進チーム副チームリーダー

当センター長と東京農工大学学長間での研修生受入れに関する覚書を取り交わし、大槻係員を受入れることとなりました。

当面の研修期間は6月末日まで。当センターとしては、若く優秀な大学職員の養成をお手伝いすることで、我が国の大学のいっそうの国際化に貢献していきたいと思ひます。

■ フィリピン出張 フィリピン論博同窓会会長を表敬訪問 ■

<http://jsps-th.org/?p=2404>

2012年3月22日（木）、23日（金）、センター長及び副センター長がフィリピンのマニラへ出張しました。目的は、フィリピン論博同窓会（PRF: Philippine Society of JSPS RONPAKU Fellows）への表敬訪問です。

PRF は、2005 年 7 月 20 日、フィリピン国内の論博経験者（JSPS 論文博士号取得希望者に対する支援事業による支援を受けて博士号を取得したフィリピン人研究者）により独自に会合が持たれ、科学技術の発展を通して国家の繁栄に貢献することを目的に結成された同窓生グループです。翌 2006 年 4 月 26 日に最初の運営メンバーが選出され **Dr. Pagasa Gaspillo**, Full Professor, College of Engineering, De La Salle University, Manila が初代の会長となりました。

現在は **Dr. Maricar S. Prudente**, Full Professor, College of Education, De La Salle University, Manila が 3 代目の会長を務め、会員数 79 名の組織となっています。



前列左から副センター長、センター長、DOST の JSPS 責任者 Ms. Ma. Lourds P. Orijola、その部下の方、フィリピン初の論博フェロー Dr. Sanchez、Dr. Maricar S. Prudente 会長

今回の訪問は、2008 年 7 月に前任のセンター長及び副センター長が PRF 会合に散会して以来、当センターとしては 2 度目であり、PRF が独自同窓会として自立した活動を行っているという引継ぎ情報の確認と、JSPS 公認同窓会への移行意思の確認が目的です。

Dr. Maricar 会長ほか 15 名程度の会員およびフィリピンにおける JSPS のカウンターパートである科学技術省 (DOST: Department of Science and Technology) の担当者にお会いすることができました。

会合では、Dr. Maricar 会長による活動紹介が行われ、その後、当センター長から当センターの活動紹介を行った後に、全体での質疑応答となりました。概要は以下の通りです。

- ・ PRF は既に毎年一回程度のワークショップ開催など定期的な活動を実施している
- ・ 上記イベントには、日本大使館や JICA、また JSPS のカウンターパートである DOST からの参加者も招いている
- ・ PRF は既に Bylaw 等を備え、政府に登録を行っている

- ・PRF の活動には DOST による経済的・実務的支援がある
- ・PRF にはオフィシャル同窓会になる強い希望がある

・当センターの所見では、PRF の公認化への課題は以下 2 点である

- ー外国人特別研究員など論博以外の経験者を含めること（ならびに名称の変更）
- ーこれまでの活動実績リスト化、JSPS 本部への伝達（対外的コミュニケーション）

・その上で、当センターから以下 2 点を提案した

- a) 外国人特別研究員経験者への勧誘
- b) 活動実績の一覧作成
- c) DOST を通じての JSPS 本部への打診

当センターとして、a) についての可能な範囲での情報提供、b) についての当センターを通じての日本語化、書類化および本部提出、の 2 点を行うことを確認した。

また、c) についての DOST の賛意が得られた。



DOST の実務担当者にも参加いただきました。
左が Mr. Edgardo P. Samalvoro 氏で、課長クラスの方。

以上の通り、PRF の活動状況や組織体制はすでに公認同窓会となるに十分と考えられる段階であり、これを的確・効果的に JSPS 本部に伝達することが、東南アジアを所管する当センターの責務であると認識しております。

現在、PRF 側で必要な情報の整理が行われており、当センターとしては可及的速やかに公認化へのサポートを行っていきたいと考えております。

■ 研究大学プロジェクト予算の大幅減

高等教育委員会（OHEC: Office of the Higher Education Commission）高官によると、研究大学プロジェクトの予算が 20 億バーツから 8.3 億バーツに大幅減となる。研究大学予算法に基づいて国内 9 つの研究大学に措置される予算が 8.3 億バーツとなる。本プロジェクトは研究と教職員の質向上のために予算支援を行うもの。

OHEC の年間予算は 64 億バーツであり、このうち 42% の 27 億バーツが研究開発に向けられる。OHEC では、GDP の 0.2% にあたる国の研究予算を 2% へ引き上げるべく努力を続ける予定。

（11 月 28 日 Nation 紙）

■ 研究予算の大幅減を受けて

研究大学に認定された 9 つの大学では、研究予算の大幅減を受けて研究プロジェクト期間短縮や学業の質低下の懸念の声が上がっている。

チェンマイ大学では昨年度の 1.6 億バーツから 1 億バーツへの減額を予想しており、9 大学で 8.3 億バーツという 2012 年度予算に驚きを隠せず、別の資金源を探る必要に迫られている。9 大学側の当初の要求は 20 億バーツ。コンケン大学では予算減額を受けて、1.5 億バーツを工面したという。

チェンマイ、コンケン両大学ではこのまま研究予算が削られれば国家の発展が阻害され、科学技術の輸入に頼らざるを得なくなると警鐘を鳴らす。

タイ学長委員会委員長も務めるスラナリー工科大学では、洪水復興による研究予算の削減に理解を示しながらも、翌年以降もこれを続けてはいけないと警告を発している。

（11 月 30 日 Nation 紙）

■ チェンマイ大学が農民子息用の枠を設置

チェンマイ大学は、全国の 11 学年生（日本の高校 2 年生に該当）に対し、農学部で最大 70 名の「農業後継者」枠を設けることとした。両親に農民を持つ者で、理数系の、10 学年または 11 学年の GPA が 2.0 以上であることが条件となる。農業経済、昆虫学、栽培学、農学、園芸、植物病理学、繁殖、畜産学の 8 つの専攻から選択可能で、このうち筆記試験をパスした 2 名には、学士号取得のための授業料である 8 万バーツの奨学金が与えられる。農学部では同じ専攻で 50 名の「農科学者」枠も設けており、GPA 2.5 以上を求めている。

（1 月 9 日 Nation 紙）

■ 学生からの教育への投資要請

1 月 14 日、タイ学生員会は会長を筆頭に 95 名のメンバーでインラック首相との面談に臨んだ。同委員会は奨学金、指導者、教材、学校施設の不足する農村地域の子どもに高等教育への機会を増やすよう、首相に委員会の要望を提出したという。特に学生奨学金基金の拡大と貧しい子供たちへの適用を求めた。また同時に、環境法の強化と民間・公共両セクターがタイ学生員会と協働することを許可することで、若者の環境意識の向上を図るようにも求めたという。さらに 2015 年のアセアン経済共同体（Asean Economic Community）に向けて英語教育の強化、ホームレスの少年に至るまでの英語教育提供、とアセアン加盟国間での若者対象の文化交流事業の拡大を求めた。

また、インラック首相は 1 月 14 日、大学自治権に反対する学生グループから手紙を受け取ったという。グループは、学生や教員、大学関係者へのヒアリング調査によって自治権付与による明と暗を明らかにし、同時に自治権付与によって学生負担の増加がないよう保証することを求めているという。特にカセサート、コンケン、ドゥシットラジャパット、シラパコーン各大学への自治権付与に関しては即時の計画撤回と同時に、すでに自治を得ている大学、その過程にある大学、国立大学の各校の支出の調査を求め

ている。要請は続き、学士レベルまでのタイの全若者に対する教育の無償化を求めている。

(1月15日 Naciona 紙)

■ アセアン経済共同体と中国とタイの教育

タイでは 2015 年のアセアン経済共同体 (AEC: Asean Economic Community) に向けて、今年中にトップレベルの教育会議の開催を計画している。東南アジア教育大臣組織 (Seameo: Southeast Asian Ministers of Education Organisation) と域内の高官レベルでの会合を主催する予定だ。Seameo はアセアン各国及び東ティモールでの域内教育・科学・文化の発展を目的としており、域内に 19 の教育センターを設けているが、AEC に向けて十分な準備ができていないとタイ教育省次官は語る。アセアンはより緊密な連携を図るため、各国の教育関係高官と Seameo 高官の会議を行うことになる。

タイは既に今年 1 月に Seameo 高官会議、教育に関するアセアン会議、教育に関するアセアン+3 会議を開催している。タイでは再度それらを今年 11 月に開催する準備ができており、その後は各国で持ち回りにすることを提唱している。会議に向けては 19 のセンターとの綿密な調整と準備を行う予定とのこと。

なお、Seameo では情報プラットフォームとしてのバーチャル大学設立を提案しているが、その詳細については明らかになっていない。アセアン高官会議では、アセアン大学連合 (AUN: Asean University Network) のアセアン単位交換システムを拡大させるつもりで、これには 2011-2012 年の 26 加盟大学による学生交換や単位交換などの試行の結果を反映させる予定である。高官会議ではまた学生の学業レベルの向上と成長をいかに高めていくかも議題となる。教育に関するアセアン+3 会議では学生交換の促進を計画しているという。

会議では、タイと中国との対話 20 周年を記念し、同時にアセアンと中国の若者のより一層理解と

友情を強める目的で、今年中にアセアン中国若者プログラム (AseanChina Youth Caring and Sharing Programme) を開催するよう、その出席者に提案した。同プログラムではバンコクの高校生を中国雲南省昆明へと招待する教育ツアーを用意しているという。

会議ではまた、アセアンがいかにして中国の「留学生 20 万人計画 (Initiative of Double 100, 000 Students Mobility)」に乗じていくかも議論された。

(1月23日 Nation 紙)

■ チュラロンコン大学工学部 AEC に向けたカリキュラムの再編成

チュラロンコン大学工学部長 Boonsom Lerdhirunwong 准教授によると、同学部の国際コースを含む 17 の工学プログラムについて、学生の学びに力点を置いてカリキュラムの再編成を行うという。より効果的、実践的な学びに力点を置くことで、就職に対しても有利に働くことが目的という。弱点とされている英語には特に力点を置き、タイ語コースで学ぶものは 1 セメスターで必ず 1 つは英語での科目をとるようになる。そうすることで、学内の語学センターで最低 100 時間の自習が求められることになるという。TOEFL で 550 点以上取れる場合は、学部がテスト費用の負担も行う。

アセアン地域及び AEC (アセアン経済共同体 Asean Economic Community) そのものについての知識も深めることも重要な役割となる。学生が何を学ぶ必要があり、それをいかにして学ぶかを示す「AEC パスポート」が提供されるという。学部長としては、遠隔地域の人々に対する 1-2 週間のボランティアキャンプにタイ人及び隣国学生を参加させ、お互いから学ばせることも必要と考えている。

同時に、他学部の教員とも連携して、例えばバイオメディカル工学など社会の要請にこたえるプログラムを作成したいと考えている。これによってタイ国内での医療製品生産が可能になり

輸入を減らせるという。

同学部では、卒業生がアセアンや AEC 発効後に活躍できるよう既に 8 年に渡ってカリキュラムの調整を行ってきており、実際に日本や中国の企業が直接リクルートを行っている。シンガポールで働く卒業生も多く、労働市場が広がりより競争的になった時に卒業生が生き残れるよう知恵を絞っているという。同学部では、900 人の卒業生のうち毎年 3 分の 1 が進学し、3 分の 2 が就職の道を選んでいる。

(1 月 24 日 Nation 紙)

■ インラック首相「西方外交」路線を継承

1 月 26 日インラック首相が、タクシン首相が打ち上げたインドとの「戦略的パートナーシップ」の修復のためのインド外遊を終えて帰国した。この戦略はインドを東南アジアに、タイを南アジアに連携させるという相互関係にあるもので、タイの西方政策とインドの東方政策の両立となる。首相は、亜大陸が世界に大きな影響を及ぼし、多くのインド人ビジネスマンが Fortune500 に名を連ねるようにもなったインドの過去 20 年間の成長と発展を称賛した。

インラック首相とモハメド・シン首相の会談ではモノ・サービス・投資に関する自由貿易協定 (FTA) について 7 月までに結論を得るよう、その交渉を 3 月までに加速させることで同意した。会談後には 6 項目にわたる協定書に調印が行われ、その中には刑事被告人の釈放や防衛協力に関する覚書、FTA 成立に向けたフレームワーク協定の修正が含まれる。高官によれば、フレームワーク協定には早期収穫措置 (early-harvest scheme) が加えられた。

両国は科学技術分野、文化交流も促進する方向で、タイのチュラロンコン大学とインド文化交流委員会の協力関係も構築することになる。

(1 月 27 日 Nation 紙)

■ 学生の成績の落ち込み

タイの学生は数学及びその他の科目で悲惨な成績を収めている。一般科目 (GAT: General Aptitude Test) 及び専門科目 (PAT: Professional Aptitude Test) のテスト結果では、数学の平均点は 300 点満点中 39.6 点、その他の科目でも 50% を下回った。教育試験研究所によると、284,754 人の受験者の平均点は 300 点満点中 130.59 点とのこと。

詳しく見ると、GAT1 は受験者 284,739 人で平均が 80.14 点、GAT 2 は受験者 284,750 人で平均 50.45 点 (ともに 150 点満点)。PAT1 (数学) は受験者数 200,693 人で平均が 39.64 点、PAT2 (科学) 173,048 人で平均 91.59 点、PAT3 (工学) 39,488 人で平均 83.45 点、PAT4 (建築) 14,057 人で平均 122.24 点、PAT5 (教職) 175,548 人で平均 149.43 点、PAT6 (美術) 22,501 人で平均 135 点となっている。

チュラロンコン大学によれば、GAT/PAT のテスト結果は深刻な教育問題が解決されていないことを如実に表していることになる。現在の教育が問題解決能力の育成には役立っていないという。政府がタブレット型 PC の配布よりも教育の質を高めることの方が大切だとの意見もある。

(2 月 1 日 Nation 紙)

■ タイでも 9 月開講の議論

6 月ではなく 8 月から 9 月にかけて授業を開始するという、2 月 6 日の公立私立大学の代表者による合意に従えば、2014 年の大学新入生にしてみれば最初のセメスターよりも前に 4 か月の夏休みが来ることになる。合意の実行を決断する前に、基礎教育委員会 (Obec: Office of the Basic Education Commission) は、その場合の影響について文部省傘下の各機関と協議を行う予定である。

高等教育委員会 (Ohec: Office of the Higher Education Commission)、タイ学長委員会 (CUPT: Council of University Presidents of Thailand)、タイ Rajamangala University 学長

委員会、タイ私立高等教育機関連合は2月6日、2015年のアセアン経済共同体（AEC）発足に先立って、2014年の開講時期を試験的にアセアン各国及びその他の国々に合わせるという結論に至った次第である。国際コースについては2013年から要請があり、準備ができる大学では次の学業年である2012年から統一させていくことも許されているという。

これに対し、キングモンクット工科大学トンブリー、ナレスワン大学を含むいくつかの大学では従来の開講を希望している。

Ohecでは、この件を教育大臣に諮るとともにObec、職業教育委員会（Ovec: Office of the Vocational Education Commission）、その他の関連団体と協議し、理解を求めていく見込み。開講時期の統一は国の高等教育に資するとの考え。入試をはじめとする諸事項について学生など関係者に負担が生じないよう慎重に検討する構えである。

CUPTは統一に前向き。昨年末の段階で加盟大学に対してアセアン各国と同時期の開講を許可するアナウンスを出しており、2014年に関しては6月ではなく8月に遅らせるよう要請を行っている。

(2月7日 Nation紙)

■ チュラロンコン大学初の女性大学委員長

教育者Dr. Khunying Suchada Kiranandanaがタイのトップ校であるチュラロンコン大学の大学委員会議長に初の女性として選任された。Dr. Suchada 名誉教授は2004年4月から2008年3月まで同大学初の女性学長を務め、学内の官僚機構を独立の研究機関として現行レベルまで軽減することに尽力した。2月13日の就任日まで、65歳のDr. Suchadaは大学委員会の委員であり、自身が主席として卒業した商業・会計学部の学部長でもあった。

(2月13日 Nation紙)

■ 学問の自由をめぐるタマサート大学の動向

2月13日、タマサート大学委員会は学内での不敬罪法規反対キャンペーンを禁止するそれまでの取決めを覆した。大学理事会後に提出された発表では、原則として学内でのあらゆるキャンペーンを許可するとされている。ただし、実施責任者はそのキャンペーンが合法の範囲内であることに責任を持つこと、意見を異にする者への暴力の禁止、スケジュール通りの終了、交通妨害の禁止などが盛り込まれている。また、キャンペーンが何らかの思想的争議を引き起こした場合は、大学は危険回避に向けて確固たる措置をとるという。「タマサートは自由の場である。学問の自由と表現の自由の場である」とステイメントは続く。委員会ではこの厳しい取決めは意見を異にする両者に当てはめると説明する。

タマサート大学では2週間前に不敬罪法規に反対するキャンペーン実施者の大学施設の使用を禁止したが、これによりニティラット・グループを刺激することになり、グループを支持する人々の間で大きな騒乱を招いた。同大学は表現の自由に触れる従来の決定を見直すよう求められ、学内での対立と混乱を避ける目的から今回の決定に至った。

刑法112条に定められた不敬罪を見直そうというニティラット・グループの運動を続けてもよいのかという質問に対し、タマサート大学副学長は「個別に判断するほかないが混乱と騒乱を起こすものではなく、真に学問的な表現である以上、学内でのあらゆる運動は許される」と答えている。

(2月14日 Nation紙)

■ 最北部10県への490億バーツ洪水対策予算

湧水地である10県に合計492億バーツの水管理予算が措置、同時に天然資源環境省ではピン川、ワン川、ヨム川、ナン川の湧水地域の森林地帯復旧を4月までに実施する。水資源管理に関す

る戦略員会（SCWM: Strategic Committee on Water Resource Management）によれば、これらの取組みにより水保有能力が昨年に比べて 50 億立方メートル増えるという。

最北部 10 県の知事との会談の後、インラック首相はシリキットダムとプミボンダムを 5 月 1 日までに水位 45 パーセントまで放流するよう指示した。雨季にはこれら 2 つの主要ダムで 150 億立方メートル、水保有地帯で 50 億立方メートルを維持し、あと 100 億立方メートルが河川や水路から放流される。ソーシャルメディアを含むあらゆるチャンネルを利用した水の状況の把握と災害警報システムを包含した統一的水予測システムの責任者には科学技術大臣が就任。

インラック首相はまた湧水地である 10 地方に対し、SCWM の 6 短期及び 8 長期計画に沿う形での流域管理を命じた。これら総予算額は 492 億バーツにのぼる（うち 107 億バーツが 580 の短期プロジェクト、485 億バーツが 1900 の長期プロジェクトに充てられる）。短期プロジェクトは 4 月までに達成される見込み。SCWM の計画を流域管理と連携しながら進めることで森林地域の復旧とベチベルソウの成長を 4 月までに完成させ、7 月までを見込むその他の洪水対策に間に合わせることを期待している。

インラック首相は該当地域を視察で訪ね、集まった 400 名の支持者に対して予算措置を約束した。

（2 月 15 日 Nation 紙）

■ 入学試験の変更

2 月 18 日、タイ学長委員会（CUPT: Council of University Presidents of Thailand）は 2013 年度からの大学共通入学試験における科目の比重の変更に同意した。健康科学、生命科学、農業科学、教育、健康教育、芸術、人文社会科学の分野で、変更が実施されることになる。大きな変更ではないため通常必要な実施 3 年前からの発表を免れ、2013 年度から実施されるという。なお、教育大臣は本会合後、昨年度実施された

政府職員の給与 5%増の対象外とされた大学職員の給与について、予算部門と調整することを明かした。

（2 月 19 日 Nation 紙）

■ 政府系研究開発プロジェクトに新評価システム

新種米から産業製品の開発に至るまで、政府主導の公金による研究プロジェクトが監査の対象となる。NRCT によると、タイでは毎年、政府および民間セクターによってそれぞれ 100 億バーツが研究開発に投資されているが、それら研究に対する評価制度は設けられていない。そこで NRCT では、コメ・ゴム・サトウキビ研究を対象とした評価システムを作成することになった。

多くの大学により、コメ研究に年間 6 億から 7 億バーツがすぎ込まれているものの、NRCT では無駄も含まれていると考えている。一方、ゴム研究には年間 1 億バーツほどしか投資が行われず、世界最大のゴム輸出国のタイでの輸出が一次産品としてのゴムに偏っており、年間 1,000 億バーツにのぼるゴムの海外市場において工業製品としてのゴム製品は 15%にとどまっているという。

NRCT では、評価システムの導入によってより効率的な資金配分の実施を目指す。システム構築は、タイ開発研究所（TDRI: Thailand Development Research Institute）と共同しておこなう。

TDRI によれば、多くの政府系研究機関では独自に研究開発プロジェクトの評価を行っているものの、その結果の公表はされておらず、独立した評価機関が求められている。TDRI では既に、研究所及び大学の数百人規模の代表者に対して、評価のフレームワークと評価項目の提案を行った。評価項目には、経済状況や政策実現、一般市民への影響についてのインパクトをはかるものが含まれている。また、特許や製品開発へつながったかどうか重要な要素となるという。評価システム第一案は 9 月までに完成予定。

タイの研究開発予算は多くの新興国、先進国に後れを取っており、韓国の GDP 比 2%に対して、タイは 0.25%に限られている。

(3月7日 Nation紙)

■ 女子学生よ、大きな声を

女子学生へのハラスメントが問題になっている。制服の指導と称して体に触れたり、特に美しい学生に比べて普通の学生の成績が低く評価されるといった訴えが、学生ネットワークから報告されている。渦中の大学では、学内ではそのような訴えは出されていないと発表する一方で、そういった教員がいれば厳しく対応すると答えている。

高等教育委員会 (OHEC: Office of the Higher Education Commission) では、そういった場合はひるまずに警察に届け出るように訴えている。

(3月7日 Nation紙)

■ アセアン・EU 科学技術パートナーシップ

東南アジアとヨーロッパは今年、科学技術パートナーシップを構築した。2012年は「Asean-EU Year of Science, Technology and Innovation」として知られることになるだろう。

今後、アセアンと EU による科学協力の重要性を広めるためのイベントが多数企画されている。欧州全体の研究開発政策を担当する Geoghegan-Quinn 氏はシンガポールでの会合で、東南アジアとヨーロッパの 2 国間協力を軸に、EU とアセアンの政策レベルでの重要性が増していくと語った。2 地域連合間では、再生可能エネルギー、海洋資源、ICT といった政策目標で共通点を有している。

ヨーロッパでは研究開発の枠組みとして 2007 年から第 7 次欧州研究開発フレームワーク計画 (FP7: The 7th Framework Programme for

Research and Technological Development) 立ち上げられており、農業、漁業、健康、ナノテクノロジーといった分野への投資を強めている。来夏からの相手の国、企業・研究所の別を問わない共同研究に約 100 億ユーロを準備しているという。アセアンとの案件は 147 あり、すでに第 6 次の総数を越えている。このうち多いのはタイ、ベトナム、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール。タイは農業とバイオテクノロジー、マレーシアはナノテクノロジーや国境を越えた農業研究、ベトナムはエネルギー、環境、健康、農業等でアセアン地域の中ではトップのパフォーマンスを見せているという。なお FP7 は 2013 年で終了し、2014 年からは Horizon2020 という新たな枠組みが開始される。

Horizon 2020 では、800 億ユーロの予算を用意し、第一弾から三弾までのプロジェクトパッケージを準備している。EU としてはアセアンとの伝統的な二国間関係から、より進んだ二地域関係の強化を見込んでいるとう。

タイはアセアン内でもっとも FP7 への関与が高く、国内コーディネーターはタイ国科学技術開発庁 (NSTDA: National Science and Technology Development Agency) が勤めている。NSTDA では FP7 サポート・オフィスを立ち上げ、公募の連絡やマッチメイクなどを行っている。

タイと EU 各国の間には 30 年の交流実績があり、今日では e-science や再生可能エネルギー分野での協力を深めている。

同時に、EU にとって第 2 の貿易相手国であるシンガポールとの関係強化も視野に置いている。シンガポールでは 2011 年から 2015 年まで 5 年間の「Science, Technology and Enterprise Plan 2015」計画を打ち上げ、研究開発に 161 億シンガポールドルの投資を行う予定。シンガポールとしては、FP7 の枠組みを利用しながら、自国研究者の強化を目指している。

(3月13日 Nation紙)

■ NSTDA が災害対応に焦点

タイ国科学技術開発庁（NSTDA: National Science and Technology Development Agency）では、3月24日から28日までサイエンスパークにおいて「科学技術：効果的な災害対応（S&T Knowledge: Key Effective Disaster Response）」と題して、年次集会（NAC2012）を開催。

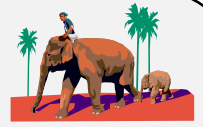
日本の理化学研究所より川合真紀理事を招いて「災害軽減と復興における科学技術の役割（Role of Science and Technology in Natural Disaster Mitigation and Recovery）」と題した講演を行う。また、「2011年大洪水の経験（"Thailand's Experience of Mega-flood 2011）」と題したパネルディスカッションを水・農業情報研究所（Hydro and Agro Informatics Institute）Dr Royal Chitradon 所長、地理情報宇宙開発機構（GISTDA: Geo-Informatics and Space Technology Development Agency）Dr Anond Snidvongs 理事およびナノテクノロジーセンター（National Nanotechnology Centre）Prof Sirirurg Songsivilai 理事によって行われる。

この他、防災、災害低減、復興への科学技術の役割を示す展示や講演会が多数行われる予定。

（3月20日 Nation 紙）



カイさんのタイご案内



Songkran Festival 2012 (ソングラン: タイの旧正月)

ソングランはタイの伝統的な新年です。2012年のソングラン祭は4月13日に始まり、地域によって3~10日間続きます。タイ人は休暇を利用して揃って帰郷します。

タイではこのお祭りを水ともに祝います。一年の一番暑い季節を互いに水をかけあって過ごすのです。バンコクで一番有名なのはカオサン通りで、4月13-15日の間、タイ人や外国人がみんなですづ濡れの水浸しになります。



4月13日は敬老の日でもあり、日頃の感謝と祈りをこめて老人たちの手のひらに香り付きの水をたらしめます。また、この期間にはもう一つ重要な伝統文化があり、寺院や家庭で仏像に香りのついた水をかけます。



しかし一方で、ソングラン祭りの4月11-17日は「7危険日」とも知られ、酒酔い運転やスピード超過、二輪車の衝突などの死亡事故が相次ぎます。

翻訳：副センター長

研修員の大槻さんは4日間の休暇のうち2日間をカオサン通りをはじめとした主戦場での戦いに費やしたそうです。2年目の副センター長は余裕の引きこもりです。



Map of JSPS Bangkok office

By train

5 minutes walk from exit No. 1

BTS (sky train) Asoke station

MRT (subway) Sukhumvit station



By Taxi

Serm-mit Tower at Sukhumvit Soi 21 (Asoke)

เดินทางมาที่ เจเอสพีเอส สำนักงานกรุงเทพ
มาส่งที่อาคารเซรมิตร์ ซอยสุขุมวิท 21
(อโศก)



Japan Society for the Promotion of Science (JSPS) Bangkok office
1016/1, 10F, Serm-mit Tower (main building)
159 Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110 Thailand
Tel: 02-661-6533

[last update on Mar. 19, 2012]

日本学術振興会バンコク研究連絡センター / JSPS Bangkok Office

No. 1016/1、10th Fl. Serm-mit Tower

159 Sukumvit Soi 21、Bangkok 10110

Tel: +66-2-661-6533 Fax: +66-2-661-6535